

## 東京国立博物館所蔵ミャンマー宝冠如来三尊像について —ラカイン地方アラカン王国の宝冠如来—

米本友梨江（早稲田大学）

東京国立博物館には、ミャンマー請来とされる金銅仏が4件収蔵されている。宝冠如来及び両脇侍坐像（TC-761）はそのひとつである。本作は金銅の三尊形式で、宝冠如来を中尊とし、如来形の像を脇侍とする。高さは台座を含め19.6cmほどだが、東京国立博物館に所蔵されている他のミャンマーの金銅仏のなかでも作行きが良い。東京国立博物館では本作の制作地、制作年代をミャンマーのパガン朝時代12～13世紀としているが、発表者はミャンマー西部に位置するラカイン地方にかつて存在した、アラカン王国のムラウー朝16～17世紀の制作ではないかと推測する。ラカイン地方では、その歴史の始まりから独自の支配者や王の下で独立しており、現在ミャンマーの最多民族であるビルマ族による国家（パガン朝、タウングー朝、コンバウン朝等）とは別にアラカン王国を築いていた。1785年にコンバウン朝に占領されるまで独自の王を戴いていたため、ビルマ族国家とはやや異なる歴史的背景を持つ。

本作にはいくつかの問題とすべき点がある。まず、中尊の如来が宝冠を戴く点について、同様の形式はラカイン地方に限らずミャンマー全土で制作されている。ミャンマーにおける宝冠如来は、転輪聖王との関連や、ザブパティ（Jambupati）王と釈迦の伝説と関連付けられることが多いが、アラカン王国における宝冠如来の制作には王の戴冠式に関連していることが先行研究によって示されている。また、本作は特殊な印相を示し、持物に関してもそれが何であるかは定かではない。更に、本作の台座の前面、背面にはそれぞれ像が配されている。前面に配された像は、本作と類似するラカイン地方制作の像にしばしば見られる表現で、おそらく地母神を表現したものと考えられる。台座背面の像と似た図像は、ラカイン地方のパゴダで多く用いられており、本作における像もそれらの図像と同じような辟邪の役割を持つとみて良いだろう。

本発表では、ラカイン地方制作の仏像と本作を比較し、本作の制作地、制作年代がアラカン王国の16～17世紀の制作であると推定する根拠を提示したい。また本作の制作意図を探るため、先行研究が示唆する戴冠式で用いられた宝冠如来と本作との関係を検討する。印相・持物については、類似した像や先行研究による指摘を踏まえて解釈の可能性を示す。台座背面の像に関しては図像が一致する例を挙げ、前面の像に関してはミャンマーにおける地母神像の特徴を有することを指摘したい。

日本において、ミャンマーの仏像は東京国立博物館をはじめ、いくつかの機関に収蔵されている。しかし、それらは東南アジア美術の一環として扱われ、ミャンマー仏教美術史の中での位置づけは不明なものが多い。本発表を、ミャンマー仏教美術への理解を深める足掛かりとしたい。